

- 2010/04/29 UNMINの安眠を妨げる3党チキンゲーム
- 2010/04/28 「銃を持つガンディー」としてのロイ(3)
- 2010/04/26 「銃を持つガンディー」としてのロイ(2)
- 2010/04/25 「銃を持つガンディー」としてのロイ(1)
- 2010/04/24 浅井基文氏のオバマ批判と北朝鮮擁護論
- 2010/04/23 アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告(8)
- 2010/04/22 アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告(7)
- 2010/04/21 アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告(6)
- 2010/04/20 平和構築：日本の危険な得意技になるか？
- 2010/04/19 ロイ、公安法違反容疑で告訴される
- 2010/04/19 アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告(5)
- 2010/04/18 アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告(4)
- 2010/04/17 制憲議会延長密約に政治家の有能を見る
- 2010/04/16 アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告(3)
- 2010/04/14 アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告(2)
- 2010/04/11 アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告(1)
- 2010/04/10 ウルトラ・マラソンの平和構築力
- 2010/04/09 既得権化するUNMINと制憲議会
- 2010/04/04 国王の権威、GPの権威、そして憲法の権威へ
- 2010/04/03 30万アクセス、御礼
- 2010/04/01 外国人研修実習制は奴隷制：国連調査報告

2010/04/29

[UNMINの安眠を妨げる3党チキンゲーム](#)

谷川昌幸(C)

UNMIN(国連ネパール政治ミッション)の任期は、5月15日まで。延長されるかどうか、まだわからない。[日本政府は、早々と日本陸軍ネパール派兵を7月末までと決めている。](#)軍事についてはやけに手際がよい。

UNMINは、ネパール政府の要請、あるいは当事者の合意がなければ、駐留できない。ところが、いまのネパール政府は、三大政党の三すくみで、まともな意思決定ができない。このままでは、UNMINは平和構築に失敗し惨めに撤退するか、あるいは「不法」駐留となる。

これまで、UNMINはマオイスト最悪だと非難されてきた。自称マオイスト19,602人を「戦闘員」として資格認定するなど、たしかにそのように見られかねない面がいくつもあった。[\(マオイスト戦闘員はプラチャンダ党首によればせいぜい7~8千人。\)](#)

しかし、UNMINがマオイストに厳しく対処すれば、マオイストがUNMIN駐留への同意を撤回する。甘ければ、NCやUML、さらには後見役のインドが納得しない。このさじ加減が難しい。

したがって、三大政党の三すくみ不決断で、UNMIN撤退となる可能性は十分にあり得る。そうなると、国王もいないし、UNMINもいなくなり、ネパールは泥沼の内乱に陥るおそれがある。

以前に指摘したように([制憲議会延長密約に政治家の有能を見る](#))、三大政党が制憲議会延長で密約をしていた(いる)ことは事実であろう。いまは、いかに自派に有利な条件でCA、UNMINの延長を図るかの駆け引き、チキンゲーム(チキンレース)の終盤というところであろう。

臆病なのは、マオイストか、それともNC,UMLか？ 最悪は、三党すべてが「勇敢」であり正面衝突すること。最悪よりさらに惨めなのが、三党とも内輪もめで誰もハンドルを握れなくなり、アナーキー状態で衝突すること。

アナーキーが一番怖い。CAとUNMINの延長か、あるいは簡潔な「基本法Grundgesetz」を制定し、CA任期満了、「基本法」による新議会選挙実施を目指すか、そのいずれかが望ましい。基本法(成文憲法)など、その気になれば、1日で作成できる。

【追加】

ランドグレンUNMIN代表が、28日、マオイスト副党首バブラム・バタライ博士と会見して、UNMIN延長について話し合った。人民解放軍2万人の国軍統合が、主な交渉条件だったらしい。しかし、これは難問、UNMINはどこまでマオイスト要求に応えることができるのだろうか？ 5月15日任期切れのUNMINとの間でもギリギリの交渉が続く。

10:52 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [政党](#)

2010/04/28

「銃を持つガンディー」としてのロイ(3)

谷川昌幸 (C)

Q.インド民主主義は「エセ民主主義」であり、暴力的抵抗はやむをえないということか？
その通り。インドは寡頭制であり、中流階級と上流階級のための民主主義でしかない。もしあなたがダンテワラの住民なら、インドは全く民主主義ではない。州首相は、森から出てきてサルワ・ジュドムのキャンプに入らない者はテロリストだ、と言い放った。ニワトリを飼い、田畑を耕すことがテロ活動なのか？ これが民主主義か？

Q.マオイスト紛争はどう解決すべきなのか？

「グリーンハント作戦」について、三つの提案をしたい。政府がすべての了解覚書 (MOU)、インフラ開発計画を白紙に戻すこと、つまり、そのことを宣言し、説明し、ただちに凍結すること。

Q.この地域の開発は必要ないということなのか？

このようなこと(鉱山払い下げ・開発)を成長というのは、神話にすぎない。

Q.マオイストと政府の和平交渉の仲介はしないのか？

残念ながら、私はその任ではない。……そもそもマオイストとは、いったい誰のことなのか？ 「グリーンハント作戦」は誰を標的にしているのか？ この作戦では、これまで、これがマオイスト、あれが部族民というように、両者を明確に区別してきた。あるいは、マオイストは部族民を代弁していると考え人もいる。しかし、このどちらも事実ではない。マオイストの99%は部族民である。が、部族民のすべてがマオイストであるのではない。それでも、自らマオイストを公言している人々は何万人にもなる。そのうちの9万の女性が女性組織に属し、1万人が文化組織に属している。本当に、このすべての人々を抹殺してしまうつもりだろうか？

Q.チダンバラン内相については？

彼はエンロン、ベダンタや、彼と関わりのある他のすべての会社と結託している。

Q.銃を持つ少女を称賛しているように見えるが？

その16歳の少女が、CRPF隊員にレイプされ、目の前で自分の村を焼かれ、両親を殺され、それへの屈服を強いられたことを知ったからだ。……彼女にとって、自己の壊滅を受け入れるよりも、立ち上がる方がよいはずだ。

Q.インド憲法は破綻したか？

インド憲法は著しく弱体化している。……インド憲法を覆そうとしているのは、マオイストだけではない。インド国家はすでに「ヒンドゥートヴァ」運動や企業活動により覆されてしまっている。

Q.インドを見限るつもりか？

それは絶対がない。この国の人々は、世界でもっとも困難な闘いに立ち上がっている。私にとってインドは挑むべき課題であり、美であり、驚きだ。私は誇りに思う。ここで彼らが行っていることに敬意を表する。たとえ「チャティスガル特別権力法 (CSPA)」で投獄されることになっても、決してスイスに逃れ住むつもりはない。

10:03 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [マオイスト](#)

2010/04/26

[「銃を持つガンディー」としてのロイ\(2\)](#)

谷川昌幸(C)

4

Q. ダンテワラ事件以後も、マオイスト支持は変わらないか?

(この悲惨な紛争においては)富裕者が、貧困者中の最貧者を使って、貧困者と戦わせている。CRPFは悲惨な犠牲者だが、単なるマオイスト攻撃の犠牲者ではない。彼らは、出現しつつある構造的暴力体制の犠牲者である。

Q.マオイストの暴力闘争を合理化し賛美しているように見えるが? 非暴力は無力、無意味ということか?

非暴力的抵抗は、ある種の運動では有効であった。しかし、森の中では、事情は異なる。非暴力、特にガンディー的非暴力は何らかの観客を必要とする。演劇には観客が必要だ。ところが、深夜、千人の警官隊が来て森の中の村を包囲しても、そこには観客はいない。どうすべきか? 飢えている人々にハンガーストライキを続けよというのか? お金のない人々に納税拒否をせよ、輸入品ボイコットをせよ、商品不買運動をせよというのか? 貧困者たちは何ももっていない。森の中の暴力は「対抗暴力」と考えると考える。

Q.マオイストの暴力を「対抗暴力」として正当化することは、市民社会の一員に許されることか?

生存の危機にある部族民社会が消滅に抗して戦っている。その対抗策、抵抗を、国家の暴力と同等視することはできない。両者の同等視は不道德だと考える。

Q.ガンディーは嘲笑されるべき人物か?

ガンディーには、嘲笑されるべき部分と尊敬されるべき部分がある。尊敬すべきは、彼の消費の思想、簡素で持続可能な生活。しかし、かれの信託(trusteeship)はそうではない。彼は信託についてこういっている。「富裕者は、富を保有し続けてもよい。彼は自分の適正な個人的必要のために富を使い、残りは受託者として社会のためにそれを使うであろう。」これは嘲笑に値する発言の一つだ。嘲笑に何ら問題はない。

21:40 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [マオイスト](#)

2010/04/25

[「銃を持つガンディー」としてのロイ\(1\)](#)

谷川昌幸(C)

1

アルンダティ・ロイのマオイスト取材報告「同志と歩む」が集中砲火を浴び、ロイは「特別公安法2005」などにより投獄の危機にある。たしかにロイの筆力は圧倒的であり、数週間に及ぶダンテワラ取材報告を読んでビックリ仰天、こんなことを書いて大丈夫かなあ、と思っていたら、何とその直後の4月6日、マオイストが当のダンテワラで中央予備警察隊(CRPF,準軍隊)を攻撃、76人を殺害してしまった。

ロイの取材報告が直接の引き金ではないにせよ、彼女がダンテワラの武装闘争を「同志と歩む」の中で称賛したことは事実であり、4月6日の攻撃に衝撃を受けた人々がロイの糾弾に向かい始めたのも当然の成り行きといえるであろう。

2

ロイの「同志と歩む」は、マオイストが議会第一党となっているネパールにも波紋を呼び始めた。インド・マオイストは、「プラチャンダの道」を「修正主義」と非難し、これにより両国マオイストの関係が悪化、現在は仲違いの状態にあるといわれている。

しかし、ネパール・マオイスト内にも強力な暴力革命派が存在し、インド政府はインド・マオイストとネパール・マオイストとの接近を警戒している。インドのチダンバラン内相が、印ネ国境沿いに多数の検問所を設置し、国境警備を強化すると発表したのも、両国マオイストの動きを警戒してのことであろう (KOL, 25 April)。

もう一つ、ネパールで注目すべきは、ロイの「同志と歩む」を転載したのが『人民評論』だということ。王党派メディアが、なぜ人民戦争支持のロイの記事の全文を転載したのか？ネパールのメディアや政界は摩訶不思議だ。このように、ロイの闘いは、ネパールからみても、注目に値するといつてよい。

3

では、ロイはいま、体制側から浴びせられている集中砲火に対し、どう反撃しようとしているのか？ 多弁雄弁のロイは、4月14日、CNN-IBNのインタビューに応じ、ここで批判への反論を試みている。

Maoists being forced into violence: Arundhati, IBN(CNN-IBN) <http://ibnlive.in.com/news/maoists-being-forced-for-violence-arundhati/113285-37-64.html>

このインタビュー記事も、さすがインド、なかなか面白い。インタビューをしたSagarika Ghoseの質問は的を射た鋭いものであり、それに対するロイの返答も真っ正面からのもので、決して逃げたりはしない。こんなレベルの高いインタビュー記事は、ネパールではまずお目にかかれない。議論がきちっとかみ合い、論点が明確となり、したがってあとには何らかの結果が確実に残っていく。むなしい徒労感が募るばかりのネパールでの議論とは、雲泥の差だ。

インドはすごいなあ～。小国ネパールは、極論すれば、まだ「歴史なき国民」だ。1990年革命、その後の政党政治、人民戦争と、大きな事件を次々と「体験」してきたのに、その「体験」を「経験」にまで精錬定着させ、歴史の中に刻み込むことのできるだけの力を持つ記述者がいない。

インドはけた違いに大きい。次々と巨人が現れ、インドの体験の意味を文章や芸術などで表現し、歴史の中に刻みつけ、残していく。インドは「歴史を持つ国民」だ。そのような巨人たちの遺産があるからこそ、ロイもこのような取材報告やインタビューがかけるのである。

ここまでいうと、ちょっと誉めすぎ、誇大宣伝めくので、余計な前置きはこのくらいにして、以下では、インタビューの要点を紹介することにする。Qは質問の要約、回答(ゴチック)は原文からの抜粋である。

前にも紹介したように、ロイの立場は「ガンディー、しかし銃を持って」つまり「**銃を持つガンディー**」である。矛盾している？ ガンディーの冒瀆？ そうかもしれない。しかし、そんなことは十二分にわかった上で、ロイはあえて「**Gandhi with Gun**」といているのだ。

なぜそんな恐ろしいことを、ロイはいわざるをえなかったのだろうか……？



(CNN-IBN, 14 April 2010)

20:41 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [マオイスト](#)
2010/04/24

[浅井基文氏のオバマ批判と北朝鮮擁護論](#)

谷川昌幸(C)

24日(土)午後、久しぶりの好天を横目に、浅井基文氏の講演（「日米安保50年」講演会—核密約と普天間問題を検証する！—）を聴きに行った。浅井氏は、「広島平和研究所」所長。



1

浅井氏は、オバマ大統領の「プラハ演説」や「ノーベル賞受賞演説」が、日本のマスコミでもてはやされているような核廃絶を目的としたものではなく、核拡散を防止するための「核管理論」にすぎないこと、またオバマ大統領が「邪悪」に対抗するための戦争を肯定していることを指摘し、厳しく批判された。

このようなオバマ批判は、講演会に参加していた多くの長崎市民をいたく落胆させたように感じられたが、私にとっては、これまでに表明してきた私自身のオバマ解釈と同じであり、十分に納得できるものであった。

2

しかし、私としては少し納得できないようなお話もあった。それは、北朝鮮の核に関するお話で、私の聞き違えでなければ、浅井氏は次のように説明された。つまり、北朝鮮脅威論は誤りである。北朝鮮の核保有は、米日の圧力の下でのギリギリのせっぱ詰まった選択であった。北朝鮮の核兵器は防衛的なものであり、したがって米日に対して先制的に使用されることはない。お話はこのような趣旨であったと思う。

この浅井氏の説明のうち、前段はほぼ納得できる。米日の脅威がなければ、北朝鮮は核兵器まで持つ必要はなかったであろう。追い詰められたすえ、やむなく核を保有するにいたった。おそらく、そういうことであろう。

しかし、後段の、北朝鮮の核兵器は防衛的なものであって先制攻撃には使用されないという説明には、少し違和感がある。浅井氏は「防衛的」という言葉そのものは使用されなかったが、お話の内容はそのような趣旨だったと思う。ちょっとあやふやなので、この点についてネットで調べてみた。

3

浅井氏は、所長を務めておられる「広島平和研究所」のホームページにおいて、こう述べている。

「北朝鮮をここまで追い込んだのはブッシュ政権の強行一本槍の対北朝鮮政策に最大の原因があることを再確認しなければならない。アメリカの政策が今日の北朝鮮の自暴自棄に近いあがきを生んでいるのだ。」

「相手を攻撃する「能力」と「意志」とが合体したときに脅威が成立するとする立論に基づけば、北朝鮮は「能力」は持つに至ったということとなる。

しかし、北朝鮮は、核ミサイルを見境なしに日本に対して使う「意志」はあるだろうか。仮に北朝鮮が日本を核ミサイル攻撃したとすれば、それを絶好の口実として、次の瞬間にはアメリカが北朝鮮をたたきつぶすことは目に見えている。金正日が無謀な対日核ミサイル攻撃によって自国の命運と自身の存立を無に帰せしめる愚かな決断を下すはずはないのだ。」

(浅井基文「北朝鮮の核実験／ミサイル発射と日本・ヒロシマ」, ニュースレター2006年11月, <http://serv.peace.hiroshima-cu.ac.jp/dletter/n2603.pdf>)

あるいは、『週刊 金曜日』(2010年3月26日)でも、浅井氏はこう述べておられる。

「「朝鮮半島有事」とか「台湾海峡有事」といった類の主張は虚構であり、まったくのフィクションにすぎません。米国自身が先制攻撃の軍事行動を起こさない限り、こうした事態は起こりえないのです。確かに大手メディアを通じて拉致問題や核開発、ミサイル実験などを材料に、北朝鮮は「恐ろしい国」、「何をしでかすかわからない国」といったイメージが、民族差別意識も底流となって国民に植え付けられている。しかし米軍は過去に北朝鮮に対して原子力空母を意図的に接近させて威嚇しているほか、毎年のように実施している米韓合同演習も、北朝鮮にしてみれば自国への核攻撃訓練であり、それこそ国家存亡に直結する脅威なのです。国力がじり貧なうえにそこまで追い詰められたら、北朝鮮にすればハリネズミが針を逆立てるように、ミサイル実験や核実験で精いっぱい強がり示す以外、なすすべがない。

つまり、米国の先制攻撃を抜きにしてはあり得ない北朝鮮や中国の反撃を「脅威」とあげつらうなどという話は、米日軍事同盟の侵略性を覆い隠すための虚構の最たるものです。」

(浅井基文「オバマの核政策とヒロシマ」, HP「21世紀の日本と国際社会」<http://www.ne.jp/asahi/nd4m-asi/jiwen/thoughts/2010/327.html>)

4

浅井氏は、たしかに「防衛的」という表現は使用されていないが、しかしこれらの文章を読むと、北朝鮮や中国の核兵器は先制攻撃には使用されないもの、つまり「防衛的なもの」と見ておられると考えてよいであろう。

私には反核平和運動の知識はあまりないが、たしか以前、米の核は攻撃的、ソ連・中国の核は防衛的と区別し、後者を擁護する議論があったと記憶している。浅井氏の議論は、それに近いような感じがする。

このような核兵器保有の二分類は、私にはどうしても納得しきれない。米日の核戦略を棚上げにし、一方的に北朝鮮の核だけ非難するのは、もちろん正義に反する。しかし、それは十分認めた上で、いかなる理由であれ核保有には反対する、というのが、反核平和運動の本来の姿ではないだろうか。

5

もう一点、疑問に思うのは、浅井氏が合理的判断をなし得る近代国家を議論の前提にされていることだ。

浅井氏によれば、もし北朝鮮が米日を攻撃すれば、米の反撃で北朝鮮は壊滅する。「金正日が無謀な対日核ミサイル攻撃によって自国の命運と自身の存立を無に帰せしめる愚かな決断を下すはずはないのだ。」

浅井氏はこのようにいわれるが、この合理的選択の理論が破綻してしまったのが、グローバル化した現代世界ではないだろうか。現代のテロないし自爆攻撃は、近代主権国家を前提とした合理的選択理論の妥当性を完全に否定してしまっている。

アメリカが真に恐れているのは、この合理的選択をしない集団や国家の増大である。アメリカは、北朝鮮もそうではないかと恐れている。そのアメリカあるいは日本に対し、北朝鮮は壊滅をおそれ先制攻撃はしない、と試みてみても、説得力はない。

むしろ、国家破綻しそうだからからこそ、先制攻撃を仕掛ける可能性がある。そして、さらにややこしいのは、北朝鮮の苦境には米日の圧力以外にも様々な要因があり、どのような理由でいつ危機を迎えるかわからないことだ。

いずれにせよ、北朝鮮を声高な北朝鮮脅威論で追い詰めると、核あるいは他の手段による先制攻撃に走る危険性がますます増大することはたしかだ。これには、米日がいかに重武装しようが、防衛しようがない。9.11には、アメリカの核は何の抑止にもならなかった。米日は、軍事的圧力をかければかけるほど、先制攻撃を受ける危険性が増大するのだ。

だから、米日は自国の安全のために、北朝鮮脅威論により圧力をかけるのではなく、逆に北東アジアの緊張緩和にむけたあらゆる努力を尽くすべきである。北朝鮮が先制攻撃をしないからではなく、このままでは先制攻撃の危険性が高まるばかりだからこそ、日米は対北朝鮮政策を変更すべきなのである。

けっきょく、結論は浅井氏と同じになった。しかし、北朝鮮の核は防衛的であって先制使用はされない、というようにもとれる浅井氏の議論には、少々違和感を感じる。どの国であれ、武器をもてば、攻撃的にも防衛的にも使用する。北朝鮮もアメリカと同様核兵器を先制使用する可能性がある——アメリカは勝てるとの合理的判断により、そして北朝鮮は非合理的自爆攻撃として。

22:41 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [平和](#)

2010/04/23

[アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(8\)](#)

谷川昌幸(C)

8. 持久戦を戦い抜く

[1]

ロイが参加した「ブムカル蜂起記念祭」の会場には、毛沢東、マルクス、チャール・マジウムダールの写真が掲げられていた。インド・マオイストは、毛沢東・マジウムダールの持久戦理論により人民戦争を戦い抜き、権力奪取を目指している。この人民戦争に対して批判は少なくないが、ロイはその正当性をこう弁護している——

チャール・マジウムダールがはるか昔にいったことを、インド既成体制——ナクサライトを残酷に弾圧している国家——の現代のツァー(専制君主)たちが、いまいつている。中国の道はわれらの道だ、と。何と奇妙なことか。

上下逆転、内外逆転。

中国の道は変わってしまった。中国は、帝国主義権力となり他国の人民の資源を食物にしている。しかし、(中国では)党はいまでも正しい、党が心を変えたにすぎない。

党が人民の支持を求め、日々の要望に応えようとする求婚者(いまのダンダカラニャにおけるように)であるとき、それは人民の党であり、軍は人民の軍である。しかし、この恋愛は、革命後、いかに容易に苦い結婚にすり替えられてしまうことか。いまダンダカラニャで党は森のボーキサイトを守ろうとしている。が、明日、党は心を変えるかもしれない。しかし、未来のことを心配して、現在、行動せずにいられるだろうか？ 行動すべきでないともいうのだろうか？

マオイストは持久戦を戦略としているから、彼らの「和平交渉」提案は口先だけで信用できない、といわれる。組織を整え、武器を調達し、持久戦を再開するための時間かせぎの策略にすぎない、と。では、持久戦とはいったい何か？ それ自体、恐ろしく忌避すべきものなのか？ それとも、戦い方によるのか？ もしここダンダカラニャの人々が持久戦をこの30年間戦ってこなかったら、彼らは今どこにいることになっていたというのか？

持久戦は、マオイストだけのものか？ インドは、独立とほぼ同時に植民地主義国家となり、領土を奪い、戦争を仕掛けた。インドは、政治問題解決のための軍事介入に決して躊躇しなかった——カシミール、ハイデラバード、ナガランド、マニプール、テレンガナ、アッサム、パンジャブ、さらには西ベンガル、ビハール、アンドラプラデシュ、そしていま中央インドの部族民地帯で広がっているナクサライト蜂起に対して。何万もの無実の人々が殺さ

れ、何万もの人々が虐待された。

これらすべてが、優しい民主主義の仮面の下に行われてきた。これらの戦争は、誰が、誰に対して、行ってきたのか？ ムスリム、キリスト教徒、シーク教徒、共産主義者、ダリット、部族民、そしてとりわけ侮蔑を受忍せず抵抗する貧しい人々に対して、だ。インド国家が(どの党が政権にあるにせよ)本質的に「他者」を敵視する上位カースト・ヒンドゥーの国家であることは、いうまでもない。

植民地主義そのもののやり方で、チャティスガルで戦わせるためナガやミゾを送り込み、カシミールへはシークを、オリッサへはカシミール人を、アッサムへはタミル人を送り込んでいる。これが、持久戦でなくて、いったい何が持久戦だというのか？



Charu Majumdar(1918–1972) and Kanhai Chatterjee (<http://indianvanguard.wordpress.com/>)

「ブムカル蜂起記念祭」に参加したロイは、マオイストや村人たちから聞き取り取材を続けながら、帰途についた。マオイスト同志に道路まで案内され、そこで迎えのバイクに乗る。ここで、数週間にわたるロイのダンダカラニャ取材報告は終わっている。

9. ロイとガンディー

以上のロイのマオイスト取材報告を読むと、ロイの姿勢は明確である。一方で、インド社会の伝統的支配抑圧を告発し、他方で、国家＝大企業の開発を名目とした地域住民搾取を告発する。

ロイは、つねに支配・抑圧され、搾取される人々の側に立ち、彼らの抵抗や戦いを彼女の最大の武器である文筆をもって支援する。ロイを「特別公安法」違反容疑で告発した人々は、決して勘違いしているのではない。ロイは、現在の国家・州や大企業や因襲的伝統社会を認めない、危険な反体制過激派なのだから。

しかも、ロイはマオイストや部族民の武装実力闘争を是認している。取材では、暴力闘争や人民法廷の正当性が繰り返し自問自答される。しかし、結局は、それらは、国家＝大企業や因襲的伝統社会の巨悪と対比され、是認されることになる。

そして、おそらくこの立場からであろうが、ロイは、なんとあのガンジーを嘲笑する。

「攻撃されたらどうするか、わかっていますね？」とスクーデブは私に声をかけた。「もちろん」と私は応えた、「ただちに、無期限ハンガーストライキを宣言すること」。彼は岩の上に腰を下ろし、笑い出した。

「非暴力の方法」の優位と信頼の大切さについての、ガンジーの敬虔な戯言。

ロイの戦いは本物であり、尊敬に値するが、その彼女がなぜこれほどまでガンジーを侮蔑しなければならないのか、そこがわからない。ガンジーの「非暴力不服従」「非暴力抵抗」のうちの「不服従」「抵抗」の部分を見落としているのだろうか？ 非暴力では「不服従」も「抵抗」も不可能だ、とガンジーを見限ってしまったのだろうか？ ロイ自身、2002年には、こう書いている――

非暴力の抵抗運動に敬意を払わなければ、暴力に訴える人びとに、戦わずして許可を与えることになる。……出てくるメッセージは物騒で危険なものとなる。民衆の苦境を訴え、是正を求める手段として、暴力は非暴力よりもずっと有効である、というメッセージ。平和的解決がもたらされないのなら、残念だけど暴力に訴えるのもいたしかたない。そのような暴力はおそらく、手当たり次第で醜悪で、予測のつかないものになるだろう。いまNBA（ナルマダを救う会）が戦っているのは、大規模ダム建設反対のためだけではない。インドが世界に差し出す最高の贈り物、非暴力の抵抗を守るために戦っているのだ。これはアヒンサー・パチャオ・アンドラン、非暴力を守る運動というに値する。（"Ahimsa," *Hindustan Times*, 12 June, 2002. 加藤洋子訳『誇りと抵抗』p44より引用）

ロイのこの取材報告"Walking with the Comrades"は、The Guardian(UK,27 March)にも掲載されている。なんと、そのタイトルは――

「ガンジー、しかし銃を持って (Gandhi, but with guns)」

-
- 2010/04/23 [アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(8\)](#)
 - 2010/04/22 [アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(7\)](#)
 - 2010/04/21 [アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(6\)](#)
 - 2010/04/19 [ロイ、公安法違反容疑で告訴される](#)
 - 2010/04/19 [アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(5\)](#)
 - 2010/04/18 [アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(4\)](#)
 - 2010/04/16 [アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(3\)](#)
 - 2010/04/14 [アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(2\)](#)
 - 2010/04/11 [アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(1\)](#)

9:20 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [マオイスト](#)

2010/04/22

[アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(7\)](#)

7. ダンダカラニャでの闘争の歴史

[1]

翌日朝から、ダンダカラニャの森における30年の闘争の歴史を聞き取り調査。30年前、人民戦争グループ (PWG)は常備軍を保有することになり、このダンダカラニャの森に分隊 (squad)を送り、ここにゲリラ・ゾーンをつくり始めた。

村に入ったマオイストは、テンドウ葉買取価格値上げ闘争、製紙工場反対闘争などの支援を通して村人の信頼を拡大していった。

特に、森林省との闘争は重要であった。森林省の役人は、森は部族民たちのものではないとして、森の利用を禁止し、象を入れて畑を荒らし、バブール(babool)のタネをまき、土地を使えなくしてしまった。



テンドウの葉

バブールの木 (<http://www.indianetzone.com/>)

ビジャプールでは、国立公園に指定し、60村を追い出そうとした（60村もあるので下図とは別のビジャプールかもしれない）。マオイストは、森林省との闘いを支援し、撤退させることに成功した。1986～2000年には、マオイストは30万エーカーを村人たちに再配分した。その結果、ダンダカラニャには、土地なし農民はいなくなった。いまでは、数千の村、数百万の人民が、マオイストの下にある。



赤マルがダンテワラ

青マルがビジャプール,

[2]

しかし、森林省が去ったあとに、今度は警察隊が入ってきた。マオイストは、これと戦う一

方、村人の生活にも責任を持つようになった。こうして人民政府(Jantana Sarkar)が成立した。500~5000人で地区人民政府を樹立し、そこに農業省、通産商業省、経済省、司法省、防衛省、保健省、広報省、教育文化省、森林省を設置した。つまり、「地区人民政府」→「地域委員会」→「Division」。ダンダカラニャには10のDivisionがある。

これに対し、村の伝統的支配階級であるムキヤや地主たちは、既得権を守るため「人民啓蒙キャンペーン(Jan Jagram Abhiyan)」や「民主戦線」運動を始めた。そして州政府は、警察にこれを支援させた。マオイストは、人民戦争によって対抗し、これを撃退した。

[3]

ところが、2005年になると、政府がエッサール製鉄、タタ製鉄などとMOU(了解覚書)を締結し、マヘンドラ・カルマはサルワ・ジュドムを開始した。攻撃の中心は、エッサール製鉄所予定地の近くの村々であった。こうして激しい人民戦争が始まったのである。

マオイスト人民解放ゲリラ軍 (PLGA)の正式の設立は2000年12月だが、それ以前からの30年の闘争を継承しており、徐々に拡大し、いまでは大隊(battalion)規模に達している。

PLGAは、サルワ・ジュドムを村々から退却させ、いまでは警察隊やサルワ・ジュドムは駐屯地から300人~1000人編成でパトロールに出ることしかできなくなった。

しかし、MOU(了解覚書)による開発圧力は強く、政府はグリーンハント作戦(Operation Green Hunt)に着手、サルワ・ジュドムのSPOはKoyaコマンドと呼ばれるようになっている。いま政府は、チャティスガル警察隊 (CAF)、中央予備警察隊(CRPF)、国境警備隊 (BSF)、インド・チベット国境警察隊(ITBP)、中央産業保安隊(CISF)、グレイハウンド(AP警察精鋭部隊)、スコープオン(?), コブラ(?)を動員して、「人々の心を勝ち取れ(Winning Hearts and Minds)」作戦を展開している。ロイはいう――

ここダンテワラの森では、インドの魂に対する戦いが繰り広げられている。インド民主主義の危機が深まっていること、大企業・大政党・治安当局の馴れ合い共謀については、これまでに多々語られてきた。もしそれを実地で見たいなら、ダンテワラこそ訪れるべきところだ。

[4]

ロイは、日没後の移動を続け、「1910年ブムカル蜂起記念祭」会場に到着し、これに参加した。(ブムカル蜂起: 部族民アディワシの大規模な蜂起) ここには何千人ものおびただしい人々が集まっており、マオイスト幹部の演説、歌、寸劇、踊りが次々と披露された。ロイはいう――

こんなことが警察のすぐ近くで行われているとは、信じがたいことだ。グリーンハント作戦のど真ん中で。……これこそ、まさに人民の軍隊だ。少なくとも、いまここにいるのは。毛沢東議長が言ったように、ゲリラは魚であり、人民は魚の泳ぐ大海だ。いまここで、それが現実のものとなっている。



ブムカル祭参加のCNM (Outlook, Delhi)

[5]

ダンダカラニャは、「人民政府(Janatana Sarkar)」と「窃盗政府(Looti Sarkar)」の2政府状態となっている。人民政府は、村を守り、灌漑、タネ、肥料などで農業を支援し、人民法廷で裁判もしている。また、「青年共産主義移動学校」があり、生徒たちに読み書きや共産主義思想を教えている。生徒たちは、制服を着用せず、銃も所持せず、PLGAと行動を共にしている。他にも、マオイスト組織が育っている――

■女性組織 Krantikari Adivasi Mahila Sangathan

9万人が参加し、すべてマオイスト。この組織はアディワシ社会の女性差別に対する反対運動を進め、サルワ・ジュドムから攻撃されてきた。サルワ・ジュドムのスローガンは「われらは妻を2人もつ！ 必ずもつぞ！」だという。そのため、逆に女性たちがこのマオイスト女性団体に集まり、PLGAにも入ることになった。

弾圧の残忍さを見た多くの若い女性が、PLGAに参加し、いまやPLGA同志の45%は女性となっている。

■文化組織 Chetana Natya Manch(CNM)

1万人。代表のレング同志は数万人を動員できる人気歌手・詩人。

■農民組織ほか

10:02 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [マオイスト](#)

2010/04/21

[アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(6\)](#)

谷川昌幸(C)

6. ダンダカラニャの森へ

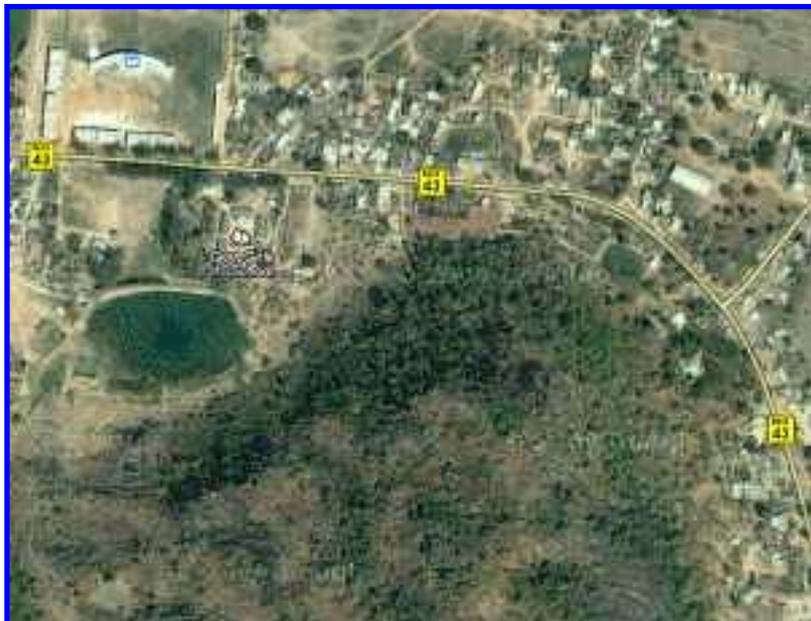
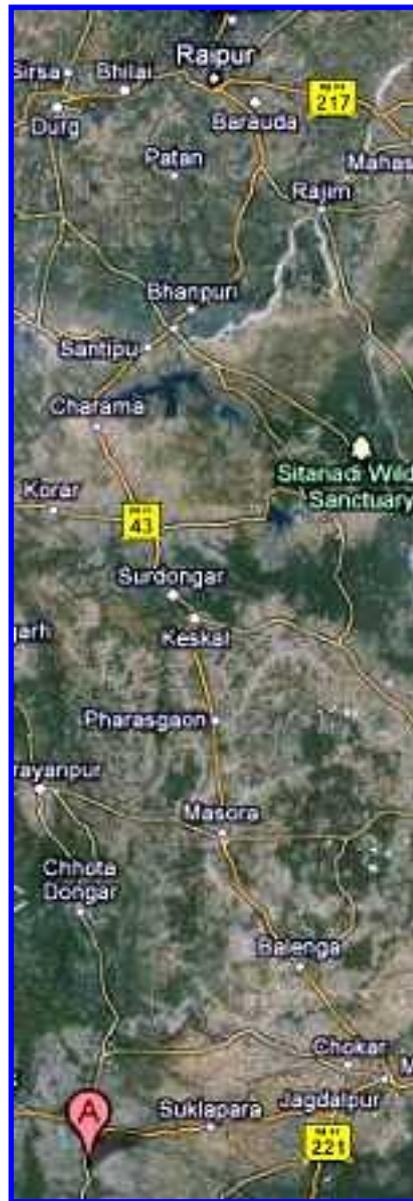
[1]

A・ロイは、マオイストからの秘密招待状の指示に従い、ライプールからダンテワラに向かった。ライプールからダンテワラまで車で10時間。この付近は「マオイスト感染地帯」で、治安部隊が守っているのは国道付近だけ。森はマオイスト同志の支配地域だ。

ロイは道路名は記していないが、このグーグル地図の43号線を南下したのだろう。衛星写真で見ると、たしかにジャングルが多い。拡大写真は「対テロ・ジャングル戦訓練校」のあ

るKankerだが、ここにもジャングルが迫っている。

ジャグダブルで夜になり、そこから西に折れ、ダンテワラに着いたのはおそらく深夜のことだろう。



(左)ライプールからダンテワラへ (中)同左 (右)Kanker付近

[2]

ロイは、このダンテワラのマ・ダンテシュワリ寺院でマオイストの使いの少年と会う。かなり大きな寺院だ。



Ma Danteshwari寺院

少年の手引きで、寺の近くのバス停で迎いのバイクを見つけ、これに乗り3時間走る。どの方向か、どの道かは記されておらず、わからない。3時間走ったところでバイクを降り、ジャングルに入り、川を渡る。この川は、あとの方でインドラバティ川を何回か渡っているの、おそらくインドラバティ川であり、もしそうだとすると、ロイらはダンテワラから南東方向に3時間走ったのだろう。衛星写真で見るとインドラバティ川はくねくねと蛇行し、上流の方は深く険しいジャングル地帯になっている。(あるいは西北の、16号線沿いのインドラバティ国立公園の方向かもしれない。こちらも深い森になっている。)

また川を渡ったところで、20歳くらいのマオイスト青年の出迎えを受け、夜になって、村に着く。「ラム・サラーム！」



インドラバティ川と43号

線

[3]

翌朝5時起床。川を渡り、村々を通り、荒廃した学校の外で野営。10代か20代初めの青年男女20人が到着。彼らは村の民兵隊(人民軍の最下部組織)である。ライフル、ナイフ、斧、弓矢、旧式迫撃砲を持っていたが、この付近はサルワ・ジュドムの圏外なので、彼らは4～5村の警備や村人の生活の支援をしている。

翌日午後、制服を着てライフルやAK47で武装した人民解放ゲリラ軍 (Peoples Liberation Guerilla Army = PLGA) 15人が到着した。彼らとともに数時間歩き、日没後、PLGAキャンプ地に到着。武器を持った約100人のゲリラに迎えられる。医者も1人いた。

9:35 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [マオイスト](#)

2010/04/20

[平和構築：日本の危険な得意技になるか？](#)

谷川昌幸(C)

朝日新聞社説「平和構築—日本の得意技にできる」（4月18日）は、要するに、自衛隊海外派兵のための御用記事である。

（前略）日本は、国連平和維持活動（PKO）予算の13%を分担し、米国に次ぐ拠出国である。5年前には国連平和構築委員会の創設にかかわった。アフガンでは軍閥の武装解除も行った。

平和構築は日本外交の一つの看板になりうるといってもいい。

フィリピン南部ミンダナオ島では、イスラム武装勢力と政府軍との紛争の現場を見守る国際監視団に、国際協力機構（JICA）が専門家2人を送り込んでいる。……

しかし、こうした実践例はまだ少ない。国連PKOへの自衛隊・警察の派遣実績は2月時点で世界で84位。政府の途上国援助（ODA）で平和構築に使われた過去4年の実績は主

要先進7カ国中6位にとどまっている。

平和構築を日本の得意技にするためには、まず現場で活躍できる人材育成が欠かせない。

広島大学は外務省の委託を受けて、3年前から、平和構築を志す若者に研修を行ってきた。国内での1カ月半の講義の後、紛争地で実地研修を積み上げる。防衛省も今春、人材養成のため国際平和協力センターを発足させた。PKOが自衛隊の本務とされてはや4年。停戦監視や司令部要員など国際的な人材づくりは急務である。

問題は育てた人材をどう活用するかであり、それは日本の外交の方針と一体として考えられなければならない。

いま国連PKOで働く日本人の文民は約30人にすぎない。政府はPKOへの派遣にもっと力を入れるとともに、各地での紛争状況を把握し、当事者間の対話や調停にも取り組むべきだ。……（朝日社説4月18日）

周知のように、平和構築には「軍事的支援」と「非軍事的支援」の二つがあり、日本が参加できるし、参加すべきなのは、いうまでもなく「非軍事的支援」である。

これは日本国憲法に明確に規定されている。憲法は、前文で国民の平和貢献義務を宣言する一方、第9条で戦争・戦力・交戦権の放棄を規定した。日本は、非軍事的平和貢献に特化し、最大限の努力をすべきなのである。

ところが、朝日社説は、まず「PKOへの自衛隊・警察の派遣」という表現で自衛隊（軍隊）と警察の区別をさらりと無視し、派遣実績が少ないと嘆き、人材育成を要請する。

そして、広島大学と防衛省を並記し、その平和構築「人材育成」努力を評価する。まさか、広島大学が防衛省と協力して、つまり学軍協力（民軍協力）により、人材育成をやっているわけではあるまいが、そう受け取られかねない記述だ。（学軍協力はたいてい軍部委託研究などから始まる。）

そして、最も許し難いのが、「いま国連PKOで働く日本人の文民は約30人にすぎない。政府はPKOへの派遣にもっと力を入れるとともに」の部分だ。議論が巧妙にごまかされ、すり替えられている。「PKOで働く日本人の文民は約30人にすぎない」を受けて、「政府はPKOへの派遣にもっと力を入れる（べきだ）」と主張されている。前段は「文民」なのに、それを受けた後段には「文民」の限定はなく、読みようによっては自衛隊も含まれている。いや、むしろ自衛隊派遣拡大こそが、この社説の隠された真のねらいなのだ。

日本にとって、平和構築支援は絶対に必要だ。しかし、それは非軍事的貢献に限定される。朝日社説にたぶらかされ、平和構築を**日本の危険な得意技**にしてしてしまってはならない。



ネパール国際平和協力業務に軍事監視要員(第4次要員)として従事する自衛官6名が、2010(平成22)年3月17日、首相官邸を訪問し、平野官房長官に挨拶しました。

国際平和協力本部

(<http://www.pko.go.jp/>)

17:20 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [平和](#)
2010/04/19

[ロイ、公安法違反容疑で告訴される](#)

谷川昌幸(C)

アルンダティ・ロイが、いま紹介中の「同志と歩む (Walking with the Comrades)」の発表を理由に、「チャティスガル特別公安法2005」違反容疑で告発された。

この取材報告を読み終えた直後の4月6日、ロイが取材したまさにそのダンテワダで、マオイストが警官隊を襲撃し、73人を殺害した。これはインド・マオイスト史上最大の攻撃であり、日本の新聞も報道した。

この報道を見て、ロイのことが心配になった。ブッカー賞受賞作家ロイの取材報告は、部族民・マオイストへの共感に溢れ、状況描写は臨場感に満ち、あまりにも魅力的。こんなことを書いて大丈夫かな、と案じていたら、6日の攻撃が起こってしまった。ロイの取材報告が直接の引き金になったとは思わないが、それがマオイスト人民戦争を鼓舞するものであることは否定できない。ロイの圧倒的筆力は、数万の援軍に勝るとも劣ることはあるまい。

警察や反マオイスト諸集団は、73人もの犠牲を出しメンツ丸つぶれ、怒りにまかせロイを「特別公安法」違反容疑で告発することになったのだろう。

この告発に対し、ロイはこう反論している——この記事は「グリーンハント作戦の戦線の背

後を訪れた著者の旅行記録」であり、「この国の人々にとって反対側で何が起きているかを知ることは、情報を得た上での決定 (informed decision) のためには不可欠だと私は考えている」。

たしかに、「チャティスガル特別公安法2005」は恐ろしい法律である。それによれば、違法組織に対し「いかなる方法で、いかなる支援を与え、受け取り、もしくは要請する」者も、有罪となる。人権活動家ビナヤク・セン博士もこの法律により2年近く投獄されている。

これは悪法である。しかしながら、ロイの反論そのものは、かなり苦しい。「同志と歩む」がマオイストの側に立ち、火炎のような激烈な言葉で政府や企業の不正を告発し、人民戦争を鼓舞していることは、明白だからだ。

悪法に背くことは何ら恥じるべきことではない。ガンジーは堂々と悪法を破り、幾度も投獄された。ロイの闘いには満腔の敬意を表するが、この反論は、もし新聞報道どおりだとすると、ロイ自身の信条にそぐわないような気がする。

* The Hindu, 14 April 2010

21:15 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [マオイスト](#)

[アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(5\)](#)

谷川昌幸(C)

5. マオイスト絶滅作戦

インド政府が部族民地域を開発するには、そこを汚染している「マオイスト」を一掃しなければならない。ロイはいう――

「マオイスト感染(Maoist-infested)」はよく考えられた言葉だ。感染/蔓延(infest/infestation)は、病気/ペスト(disease/pests)ということだ。病気は治療されねばならない。ペストは絶滅されるべきだ。マオイストは一掃しなければならない。このようにして徐々に、ジェノサイドが求められるようになったのである。

マオイスト絶滅のため、政府、大政党、企業は様々な手段をとってきた。

(1)幹部暗殺作戦

インド警察は、マオイスト幹部をねらい撃ちにすることにより、マオイスト組織を「頭なし(リーダーなし)」にする作戦をとっている。

警察は、警官をイスラエルのMossad(諜報特務局)に送り込み、標的暗殺訓練を受けさせている。イスラエルからは、レーザー・ファインダー、感熱感知装置、無人機などを輸入している。

(2)ゲリラ戦訓練

州都ライプールの近くのカンケルには、有名な「対テロ・ジャングル戦訓練校(CTJWC)」がある。BK・ポンワル大佐が指導して、警官を有能なジャングル戦コマンドに育て上げている。モットーは、「ゲリラのようにゲリラと戦え」。これが壁に書かれている。警官は、ゲ

リラ戦のあらゆる戦闘方法を教え込まれ、ジャングルではヘビを食っても生きられるようになる。

この学校からは、6週間ごとに800人の警官が訓練を修了し、対ゲリラ戦線へと送り出されている。政府はこの種の訓練校を全国に20校つくる予定だ。これにより警察は徐々に軍隊に変貌していく。「上下逆転、内外逆転。いずれにせよ、敵は人民なのだ。」



(左)Brig (retd) BK Ponwar, head of Chhattisgarh's first Counter-terrorism and Jungle Warfare College, Kanker / (右)CTJWC訓練前と訓練後。(The Tribune, 20 July 2009)

(3)御用自警団 (Salwa Judum)

Salwa Judumとは、地元のゴンド語 (ゴンド民族: 約400万人)で「平和行進」ないし「平和使節」を意味する。つまり、ガンジーの「塩の行進」を連想させる「Peace March」である。ロイは、おそらく意味をとってであろうが、Salwa Judumを「Purification Hunt」と英訳している。つまり、「浄化狩猟」「浄化狩り」だ。

サルワ・ジュドム (サルヴァ・ジュドム) は、マオイスト (ナクサライト) に対抗するため、チャティスガルで2005年に設立された自警団。政府は民間任意団体と主張しているが、実際には政府・財界が支援する御用自警団だ。ロイによると、設立に当たってはタタ製鉄とエッサール製鉄が財政支援したし、州政府も大政党も支援している。

たとえば、州政府は部族民約4万人を訓練して特別警察官 (SPO)とし、サルワ・ジュドムに参加させている。彼らは、600村からの移住部族民5万人が住む23の集団移住地で警備に当たっている。国家と州が月給3300ルピーを支給 (2008年)。村落防衛委員会 (VDC)が設立され、少年も集められ、少年兵として使役されているという。これに対し、最高裁が2008年4月、州政府によるサルワ・ジュドム援助を禁止する命令を出した。これはサルワ・ジュドムが政府御用組織であることを認めたものだが、この最高裁命令ですら無視されている。ロイによれば――

サルワ・ジュドム (Purification Hunt) は、 kongress のマヘンドラ・カルマ州議会議員が指導する恐ろしい政府御用自警団で、レイプ、村焼き討ち、何十万人もの人民の郷里からの追い出しをやっている。……サルワ・ジュドムは、地域浄化作戦であり、人々を村から道路沿いのキャンプ地に移住させ、そこで監視し支配する。軍隊用語でいえば「戦略的集落」。……BJPのチャティスガル州首相ラーマン・シン氏は、州政府はキャンプ地に移住しない村人をマオイストと見なす、と宣言した。そのため、バスタールでは、普通の村人の自宅での普通の生活が危険なテロ活動と見なされることになってしまった。

(4) 「企業の社会的責任 (CSR)」

「企業の社会的責任 (Corporate Social Responsibility)」とは、企業は営利のみではなく、社会的責任をも果たすべきだ、という考え方。インドでは、バーラト石油、マルチスズキ、ユニリーバ、グラクソなどの大企業が、保健医療、教育、職業訓練、村落開発などの支援活動をしている。貧困、未就学など多くの問題を抱えるインドでは、企業はCSRを企業活動の中に組み込まざるをえず、そのぶんCSRはさかんになってきているといえる。

しかし、ロイから見れば、こうしたCSRは不正や搾取を隠蔽するだけのものにしかすぎない。たとえば、ライプール近郊には、ベダンタ癌病院の宣伝が氾濫している。ベタンタは、中央政府内相が以前働いていた会社で、オリッサではボーキサイトを採掘しつつ、大学への財政支援をしている。

こうしたCSRが、企業の荒稼ぎを免責することになる。カルナタカでは、鉱山会社は鉄鉱石1トン当たり27ルピーを州政府に支払い、5000ルピーの利益を得ている。ボーキサイトでは、この比率はさらに企業にとって有利となる。ロイはいう――

白昼堂々と、何百万ドルもの大金が盗まれている。投票、政府、判事、新聞、TV、NGO、援助団体などを買収するに十分な金だ。癌病院をつくることくらい造作もない。……

マオイストたちは、なぜ死ななければならないのか？ 私は、オリッサ州ケオンジャールの鉄鉱石露天掘り現場を訪れたことがある。かつてそこは森であった。子供たちもここ（ダンダカラニャの森）の子供たちと同じであった。ところが、いまではそこは皮膚が剥がれた赤い傷のようになっている。赤い粉塵が鼻から肺まで入り込む。昼夜ひっきりなしにトラックが何千台も数珠つなぎになって彼らの村々を走り抜け、鉄鉱石をパラディブ港に運び、そこから中国へ輸出する。そして、中国で鉄鉱石は車と煙と急造都市に姿を変える。エコノミストたちに息もつく暇も与えないほどの「成長率」でもって。そして、戦争をするための武器へと。



タタ製鉄のCSR宣伝



ビルラ・グループのCSR

宣伝



ベダント・アルミニウム

のCSR宣伝

8:03 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [マオイスト](#)

2010/04/18

[アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(4\)](#)

谷川昌幸(C)

4. 国家・企業とマオイスト・部族民

チャティスガルなどの広大な部族民居住地域は、鉄鉱石、ボーキサイト、石炭などの地下資源の宝庫であり、またダム、発電所、製鉄所、精錬所、工場などの建設地としても適している。そのため中央政府や州政府は、内外の企業と何百ものMOU(了解覚書)を取り交わし、この地域の経済開発に積極的に取り組み始めた。

そこで邪魔になるのが、この地域に住んでいる部族民たちである。インド政府は、彼らを強制移住させることにし、その名目をいろいろ考えた。

- ・部族民を社会内 (mainstream) に引き入れるため
- ・部族民に近代的発展の果実を享受させるため
- ・部族民の福祉のため
- ・部族民を「博物館文化」のような惨めな生活から救済するため (チッダンバラ内)

相)

しかし、これらが単なる美辞麗句であることはいうまでもなく、政府の真の目的は開発地域に住む部族民を立ち退かせ、そこを企業に与え、経済開発することに他ならない。

これに対し、立ち退きを拒否する部族民たち、あるいは移住地に移っても約束通りの生活を保障されなかった部族民たちは、政府の開発政策に反対し、反政府活動を激化させていった。そして、それを支持し支援したのが、マオイストである。

この政府—部族民—マオイストの関係については、「サンドウィッチ理論」がある。つまり、普通の部族民が、国家とマオイストの間に挟まれ、両方からの攻撃にさらされている、という見方であり、これはネパール人民戦争でも多用された。しかし、とロイは問いかける

「マオイスト」と「部族民」は、世間で言われているような、別々の二つのカテゴリーなのだろうか？ 彼らの利害は一致するのではないか？ 彼らは相互に学び合ってきたのではないか？ 彼らは相互を変容させてきたのではないか？

ロイの答えは、もちろんイエスである。マオイストが部族民の闘争を支援し、それを通して、部族民がマオイストになっているのである。

インド製鉄興隆期
高炉の建設計画、続々

生産力4倍へ

土地取得は難航

ワールド
けいざい



日本企業も進出。批判は免れない。(朝日新聞2010.4.11)

9:09 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [マオイスト](#)

2010/04/17

[制憲議会延長密約に政治家の有能を見る](#)

谷川昌幸(C)

バルクリシュナ・カンド灌漑大臣 (NC)が、コイララNC党首死去以前に、制憲議会延長の密約を主要3党 (マオイスト, NC, UML)が結んでいたことを、暴露した (nepalnews.com, 17 April)。RPPのカマル・タパ党首が指摘したとおりだった ([既得権化するUNMINと制憲議会](#))。もしUNMINがこのネパール体制派3党密約を呑み、駐在期間延長を決めるなら、UNMINもグルということになる。

先に指摘したように、マオイスト・NC・UMLは、すでにEstablishmentを形成しており、現状維持が共通利益だ。またこれも制憲議会発足時に指摘したことだが、暫定憲法には6ヶ月延長規定(第64条)があり、これにより半年延長は当初から想定されていたことだ。強引に解釈すれば、何回でも半年延長を繰り返すこともできる。そして、それこそが、体制派諸政党、議員、高級官僚たちのひそかな願望なのだ。日本や欧米諸国への大名旅行(視察)もやりたい放題。

もし制憲議会とUNMINが期限延長となれば、それはネパール政治家の有能さの証明となる。MK・ネパール首相についても、2009年5月23日就任だから、もうすぐ在任1年。プラチャンダ首相(マオイスト)は9ヶ月弱しか在任できなかったから、MK・ネパール首相の方がプラチャンダ氏よりも政治家としては有能ということになる。

権力維持は政治家の固有の目的であり、この観点からすると、MK・ネパール首相は歴代首相と比べても十二分に有能だ。決して無能なのではない。



「灌漑省」は何をするところだろう？ 水を引く仕事？ しかも閣内大臣だ

9:09 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [政党](#)

2010/04/16

[アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(3\)](#)

谷川昌幸(C)

3. 矛盾の町, ダンテワラ

[1]

A・ロイがマオイストから秘密招待状を受け取り、2月のある日、彼らに会うために向かったのは、チャティスガル州ダンテワラ(ダンテワダ)。ダンテワラは県都で人口は約72万人である。



「D」付近がダンテワラ



マル印がダンテワラの町

[2]

このダンテワラは「矛盾の町」だと、ロイはいう。(ゴチック部分はロイからの引用。以下同様)

インドの真ん中の国境の町。戦争の中心地。上下逆転, 内外逆転の町。ダンテワラでは, 警官が平服を着て, 叛徒が制服を着ている。刑務所長が刑務所内において, 受刑者たちが自由になっている(2年前, 古い町の刑務所から300人が脱獄した)。レイプされた女性たちが警察留置所に入れられ, レイプ犯たちがバザールで演説している。

マオイスト支配地域のインドラバティ川を渡ると, そこは警察が「パキスタン」と呼んでいる地域だ。村々は空っぽで, 森には人々がいっぱい。学校に行くはずの子どもたちがあたりを走り回っている。美しい村々のコンクリート校舎は爆破され瓦礫の山となっているか, あるいは警官たちでいっぱい。ジャングルで繰り広げられている激しい戦争は, インド政府の誇りであり, 恥でもある。

見事な, 一気に引き込まれてしまうような力強い叙述。華麗なレトリックの意味は, 予備知識皆無の私には全部は分かりきらないが, ロイの向かうダンテワラがとんでもない矛盾の町であることは十分すぎるほどによくわかる。

[3]

ここでは, グリーンハント作戦 (Operation Green Hunt) が実施されている。この作戦は, チダンラン内相は否定するが, 実際にはインド政府が資金提供し実施しているもので, 準軍隊数十万人が部族民地域に送り込まれ, マオイスト一掃作戦を展開している。(Ben Peterson, "Operation Green Hunt: India's State Terror," 15 April 2010によれば, 軍隊と準軍隊, 約10万人が作戦参加。) このグリーンハント作戦は悲惨な戦争だ。

一方には, 十分な資金と武器とメディアと勃興する大国の傲慢で武装した準軍隊の大軍, 他方には, ごく普通の村人たち。彼らは, たぐいまれな武装反乱の暴力闘争の歴史をもち, よく組織され, 動機づけも明確なマオイスト・ゲリラ戦闘部隊によって支援され, 様々な伝統的武器を持って立ち上がった人々なのだ。

これらの人々は, この地域に昔から住んでいた様々な部族民たちである。彼らには, 何世紀にもわたる抵抗の歴史がある。英帝国に対し, ザミンダール (寄生地主) に対し, 高利貸に対し, 彼らは闘い続けてきた。西ベンガルのナクサルバリ村の蜂起——最初の毛派蜂起——の中心にも彼ら部族民がいた。今日では, ナクサライトとマオイストはほぼ同義である。

[4]

インドは, 議会制民主主義だ。ところが, インド憲法は, 植民地時代の部族民政策を継承し, インド国家を「部族民地域の後見人」としてしまった。

一夜にして, 部族民すべてが, 自分自身の土地であるにもかかわらず, その土地の不法居住者 (squatters) とされてしまった。インド憲法は, 彼らの伝統的森林利用権を否定し, 彼らの生活そのものを犯罪的なものとしてしまった。投票権と引き換えに, 彼らの生活権も尊厳も根こそぎ強奪してしまったのだ。

22:57 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [マオイスト](#)

2010/04/14

[アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(2\)](#)

谷川昌幸(C)

2. インド共産党毛沢東主義派

ロイの取材報告を見る前に、インド共産党毛沢東主義派(Communist Party of India-Maoist)の概要をまとめておく。

設立：2004年9月21日

1967年ナクサバリで武装蜂起したナクサライトを継承するCPI(ML)People's War(PWG) [Muppala Lakshmana Rao(Ganapati)] とMaoist Communist Centre of India(MMC) [Koteshwar Rao(Kishanji)]が合流し、2004年9月21日、**インド共産党毛沢東主義派(Communist Party of India-Maoist)**が成立。書記長は、Muppala Lakshmana Rao (Ganapati)。

* ナクサライトの「階級の敵」殲滅路線の指導者はCharu Mazumdar。

* A.ロイは、この取材報告では、「マオイスト」を「ナクサライト」とほぼ同義で使用している。



イデオロギー： マルクス・レーニン・毛沢東主義

持久的武力闘争により国家権力奪取。遠隔地に根拠地→ゲリラゾーン→解放区。新民主主義革命を経て人民政府樹立。

勢力： 28州のうち、20州で活動（2009）

チャティスガル、オリッサ、西ベンガル、ジャルカンド、ビハール、マハラシュトラ、アンドラプラデシュなど。

人民解放ゲリラ軍： 戦闘員1～2万人、支援者約5万人

* 1家族1人参加を要求しているといわれている。

非合法化： 2009年6月22日、インド政府は非合法活動予防法（UAPA）によりCPI-Mをテロ組織と認定し、非合法化。チャティスガル、オリッサ、アンドラプラデシュなどの州政府がCPI-Mを法的に禁止。

主な活動：

2010.04.06：チャティスガル州ダンテワダ（ダンテワラ）県で中央予備警察隊（CRPF）と県治安要員73人を殺害。

2010.01.18：ビハール州で村人12人殺害。

2009.10.08：マハラシュトラ州で警官17人殺害。

2008.11：ラルガール蜂起。

2008.07.16：オリッサ州マルカンギリ県で警官21人を爆殺。

2008.06.29：オリッサ州チトラコンダのダム湖で対ゲリラ部隊（Greyhounds）33人殺害。



(www.freemap.jp)

11:35 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [マオイスト](#)
2010/04/11

[アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(1\)](#)

谷川昌幸(C)

敬愛するアルンダティ・ロイが、インド・マオイスト(ナクサライト)の支配地に入り、彼らと行動を共にし、その現状をA4版40頁に及ぶ詳細な報告書にまとめ発表した。

Arundhati Roy, "Walking with the Comrades," *Outlook* (India), Mar.29, 2010

インド・マオイストは、現在、かつてのネパール・マオイスト以上に苦しい闘争を余儀なくされている。マオイストの支援する地域住民、特に部族民の惨状は目に余る。しかし、少なくとも彼らは、幸運にも、いまここにA.ロイという卓越した代弁者をえることになった。世界の耳目が彼らに向かうことになるかもしれない。

以下、ロイのこの取材報告を紹介するが、走り読みであり、またインドについては十分な予備知識も土地勘もないので、間違いや勘違いがあるかもしれない。それらについては、気づ

き次第, 訂正する。ご了承ください。

1. アルンダティ・ロイ

ロイは, 1961年11月24日インドのメガラヤ州に生まれ, ケララ州で少女時代を過ごす。タミル・ナドゥ州の学校を経て, ニューデリーの建築学部卒業後, 映画出演, エアロビクス教室経営など様々な仕事を経て, 著述に専念するようになった。著作は, 小説, シナリオ, 評論, ドキュメンタリーなど多岐にわたるが, 特にインドの地域住民の立場に立ち, 伝統的なカースト差別や新たな資本主義的搾取を鋭く告発するドキュメンタリーや評論は国際的にも高く評価されている。現代インドの代表的著述家の一人である。

受賞: 1997年「ブッカー賞」, 2002年「文化的自由賞」(Lannan Foundation), 2004年「シドニー平和省」, 2006年「サヒチャ・アカデミー賞」(インド政府の新自由主義政策を批判し受賞拒否) など。

なお, 『プラチャンダ: 知られざる革命家』(2008)の著者Anirban Royとは別人。両者の関係はいまのところ不明。

●主な著作

『小さきものたちの神』(ブッカー賞), DHC, 1998

『誇りと抵抗』集英社新書, 2004

『帝国を壊すために』岩波新書, 2003

『私の愛したインド』築地書館, 2000

Algebra of Infinite Justice, 2002

Listening to Grasshoppers, 2009



マオイスト・ゲリラ取材中のロイ

(*Outlook*, Mar.29, 2010)

2010/04/23 [アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(8\)](#)

2010/04/22 [アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(7\)](#)

2010/04/21 [アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(6\)](#)

2010/04/19 [ロイ, 公安法違反容疑で告訴される](#)

2010/04/19 [アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(5\)](#)
2010/04/18 [アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(4\)](#)
2010/04/16 [アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(3\)](#)
2010/04/14 [アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(2\)](#)
2010/04/11 [アルンダティ・ロイのインド・マオイスト取材報告\(1\)](#)
20:47 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [マオイスト](#)
2010/04/10

[ウルトラ・マラソンの平和構築力](#)

谷川昌幸(C)

リチャード・ブルさんという猛牛ランナー(?)が、「第4回アンナプルナ100」の記事を書いている ([Nepali Times, #497](#))。アンナプルナ山麓を71Kmも走るといふ、とんでもないウルトラ・マラソンで、この世には物好きな人がいるものだと感心した。

このマラソンには、ネパール人約40人、外国人10人が参加した。ネパール人は国軍と警察が中心らしい。優勝は国軍のカトリさんで、賞金5万ルピーを獲得した。外国人1位はサミット・ホテルのロジャー・ヘンケさん。

へえー、すごいな、と感心していたら、何と、このマラソンにはわれらが「ネパールの空の下」さんも参加していた。運動会でビリから2番目が定位置であった私から見ると、およそ信じがたいことだ。20年前、息絶え絶えに登った急峻な山道を駆け上り駆け下るとは!

しかも、17時間47分(!!)で完走、堂々の女性2位。すごい! 読むだけでアゴが出そうな突撃体験レポートが「[ネパールの空の下](#)」に掲載されている。必見、必読!

鈍足軟弱の私にはマラソンは思いも及ばないが、こうしたスポーツがもつ平和構築力には大いに注目している。古くはピンポン外交で米中国交回復が実現したし、最近ではサッカーで日韓関係が劇的に好転した。スポーツが敵愾心扇動のため利用されることはあるが、それはスポーツの政治的利用であって、スポーツそのものは本来人々の相互信頼、相互理解を促進するものである。

特に、このアンナプルナ・ウルトラマラソンのような極限まで身体を追い詰める競技は、参加者から雑念を払拭し、裸の人間とし、そのギリギリのところまで体験を共有させる。根源的なところで相互理解、相互信頼が生まれるのは当然だ。

もし今回のウルトラ・マラソンに人民解放軍の男女兵士が参加していたら、どうだろう。あるいは、各党の幹部たちが——距離は1/10でもよい——参加していたら、どうだろう。きっと、雑念を忘れ必死になって走るといふ体験を共有することによって、相互信頼を醸成する大きなきっかけとなっていたであろう。

市民による、市民のための平和貢献、平和構築である。



ガンドルン付近。1985年3月

12:40 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [文化](#)
2010/04/09

[既得権化するUNMINと制憲議会](#)

谷川昌幸(C)

制憲議会（立法議会）の「国際関係・人権委員会」が、5月15日に迫ったUNMIN任期の延長を政府に勧告した。MK. ネパール首相は延長には消極的らしいが、さて本心はどうか？

UNMINなどの国連機関のネパール駐在は、インドも中国もいやがっている。インドは、国連機関がいて、ネパールを思い通り操縦できないし、中国は一つにはチベット問題への国連介入、もう一つは国連を介した米国の影響力の拡大を警戒している。

MK. ネパール首相は、インドをバックにしているとされているので、表向きは、インドの意を汲み、UNMIN延長に消極的な姿勢を見せたのだろう。

しかし、UNMINがいなくなれば、現在の体制（Establishment）は崩壊する。統一共産党も、NCもマオイストも、相互に対立しつつも、すでにEstablishmentを構成しており、現体制の維持こそが共通利益となっている。三党とも、現体制を権威づけているUNMINには、ずっ〜と、いつまでもいてもらいたいはずだ。

*2010/03/06 [ネパール派兵、7月末まで延長](#)

そのためには、何が必要か？ いうまでもないことだが、それは制憲議会の任期を延長し、憲法制定を先延ばしすることだ。統一共産党も、NCもマオイストも、新憲法の期限内制定など、望んではない。

この「不都合な真実」を語りうるのは、体制外の勢力だ。たとえば、王党派のカマル・タパ RPP党首によれば、マオイスト・NC・UMLは、すでに制憲議会延長に合意しているという。

タパ党首発言の真偽は確かめようもないが、新憲法を制定してしまえば、現在の議員は任期満了（5月28日）で諸特権を失い「ただの人」になってしまう。600人弱もの巨大特権集団が、こんなことを望むはずがない。

特にマオイストは、現在、230議席前後を擁する第一党であるが、もし新憲法が制定され選挙となれば、おそらく圧勝は出来ず、いまのような議会における圧倒的優位は失われる。マオイストも、人民解放軍の国軍編入は要求しても、本音では新憲法の早期制定は望んでいないだろう。

むしろ、RPPなどが復権するのではないか？ カマル・タパ党首は、昨年、ソルティ・ホテルで講演を聴いたことがあるが、弁舌さわやかで、魅力的な政治家であった。マオイストや共和制への幻滅もあって、選挙ともなれば、相当の揺り戻しがあるのではないか？

カマル・タパ党首が言うように、統一共産党・ कांग्रेस・マオイストは、UNMINと制憲議会の延長に合意している可能性が高い。6か月延期でEstablishmentの誰も損はしない。それに抗して、国連が、あと1か月、5月15日でUNMINを終了させる、あとは自分たちでやってください、とケツをまくることが出来るかどうか。注目されるところだ。



華ホテル)

Hotel Soaltee (いわくと由緒のある超豪



演

カマル・タパRPP党首講

15:27 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [民主主義](#)

2010/04/04

[国王の権威, GPの権威, そして憲法の権威へ](#)

谷川昌幸(C)

近代化は「脱魔術化」(M. ウェーバー)であり、「権威」が次々と否定され、科学的「理性」の時代になることはやむを得ない。

権威=相手のいうことを、自分で真偽を確かめることなく、自ら納得し、進んで受け入れる現象。権威者(権威あるもの)→依存者

ネパールでも、240年にわたり国民統合を維持してきた国王の権威が2006年革命により否定された。そのあと王家にも匹敵する名門コイララ家のギリジャ・プラサド(GP)が国王の権威の相当部分を継承したが、そのGPもこの3月20日亡くなってしまった。このあと、いったい誰が、あるいは何が、国民統合のための権威を継承するのだろうか？

「人民」は多民族国家ネパールでは困難だし、危険なので止めた方がよい。プラチャンダ氏、バブラム・バタライ氏、MK.ネパール氏、デウバ氏、スジャータ・コイララ氏等々、有力政治家は少なくないが、いまのところいずれも国民統合のための権威となるのは無理であろう。

結局、「憲法」しかない。ネパール版名誉革命を断行し、王制復古を図る手もあるが、現状では、反革命・軍部独裁を招く可能性が高く、これは危険である。やはり、「憲法」権威主義しかない。多文化多民族のアメリカが、憲法(星条旗)の権威により国民統合を維持してきたように、ネパールも「憲法の権威」により国民統合を維持強化すべきだ。

「権威」というと、非合理で時代遅れと笑われるかもしれないが、人間、理性というよりはむしろ権威により動くものである。いや、理性ですら権威に依存しているといってもよい。当然、統治も教育も「権威」なくしては成り立たない。これはいままでは自明のことだが、権威のない私が言っても説得力がないので、「権威」を引用しその「威」を借りて説明しよう。

たとえば、M. ポラニー(1891-1976)。彼の専門は物理化学、科学哲学で議論は難しいが、『暗黙知の次元：言語から非言語へ』(佐藤敬三訳、紀伊國屋書店)における「暗黙知」や「権威」の説明は明快であり、私にもよくわかる。

ポラニーによれば、われわれは「語ることができるより多くのことを知ることができる」。全体を部分に分解し科学的にいくら詳しく分析しても、全体の知にはならない。逆に、部分の細目を明確に語ることができなくても、全体的特徴は知ることができる。たとえば、人間の顔の識別がその好例である。われわれは、顔の部分の情報が少なくても、「暗黙知」ないし「暗黙的な予知」により驚くほど多くの人の顔を感知し正確に識別できる。

これは、発見すべきもの(問題)が存在するという確信への個人的コミットメントによって可能となる。アウグスチヌスがいうように、語りうる以上の実在の存在を「信じなければ、何も理解できない」。教育も「教師や指導者に自分をゆだねることによってのみ」可能とな

る。生徒は、教師のいうことが当初は無意味だと思えても、そこには隠された意味があるはずだと信じ、つまり「教師の権威を受け入れること」によってはじめて、新しい意味をつかむことができるのである。

「ある世代から次の世代への知識の伝達は、主として暗黙的に行われざるをえない。」
(p.93)

「人間が新しい自己決定を行うとき、それが自己破壊を招かずにすむのは、それを支えている権威的な伝統の枠組みの中でみずからの限界を認識する場合だけである。」(p.94)

科学ですら「権威を根拠にしている」とすれば、統治が権威なしに成り立つはずがない。ネパールにも、国民統合維持のための権威は絶対に必要である。国王の権威、コイララ家の権威が消失してしまっただけで、そのような「権威」となりうるのは、「憲法」のみである。制定期限まであと2ヶ月弱。ネパールの人々が信じることのできる素晴らしい憲法を制定し、その憲法の権威を皆で協力し高めていっていただきたいと願っている。



■本書について

われわれが考える知以外に、もうひとつの知がある。言語的・分析的な知に対する非言語的・包括的な知、それが本書でいう「暗黙の知」である。

人間はこれら両方の知を駆使して、ものごとを知覚し、学習し、行動する。人の顔を識別し、コミュニケーションを交わし、スポーツや技能を体得できるのも暗黙知が働いているからである。さらに科学においても、この非言語的な知は重要な働きをする。たとえば問題を

知るとか、何かを発見するといった創造的な活動の源となるものである、という。

本書は、今まで光を当てられなかった非言語的な知の構造を明らかにし、人間と科学の本質を問い返す。また生命現象や科学と社会のあり方にも言及して、認識論、科学論から哲学の根本問題にわたって再検討を迫る問題の書である。 (うら表紙より)

21:16 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [憲法](#)

2010/04/03

[30万アクセス, 御礼](#)

谷川昌幸(C)

このブログが、4月2日で30万アクセスを超えた(2005.9.30~2010.4.2)。ブログ付属のアクセス・カウンターの数字であり、実際の読者数は正確には分からないが、相当数の方に読んでいただいていることは確かなようだ。

ネパールに限定し、しかも政治・経済・文化に関する評論であるにもかかわらず、こんなにも多くの方に読んでいただき、感謝している。

ネパールはいま激動期にあり、議論のネタに困ることはない。しかし、あまり頑張りすぎると続かないので、自分用の備忘録、読書ノートのつもりで、これからも出来るだけコンスタントに記事を書いていきたいと思っています。



カトマンズ(2009.9)

2010/04/01

[外国人研修実習制は奴隷制：国連調査報告](#)

谷川昌幸(C)

インド実地調査の疲れがどっと出てブログを見るのもおっくうだったが、今朝の新聞（朝日ほか）を見ると、国連特別報告者が外国人研修制を「奴隷制」と批判したとの記事が出ていたので、ネットで確かめてみた。

国連広報センターによれば、調査したのは「国連移住者の人権に関する特別報告者」ホルス・ブスタマンテ氏。「移住者の人権に関する国連専門家、訪日調査を終了」（No.1548, 3月31日）というタイトルで、公表されている。

このブスタマンテ報告によれば、日本には「人種主義、差別や搾取が存在し、司法機関や警察に移住者の権利を無視する傾向がある」。そして――

「研修・技能実習制度は、往々にして研修生・技能実習生の心身の健康、身体的尊厳、表現・移動の自由などの権利侵害となるような条件の下、搾取的で安価な労働力を供給し、奴隷的状态にまで発展している場合さえある。このような制度を廃止し、雇用制度に変更すべきである。」

"The industrial trainees and technical interns programme often fuels demand for exploitative cheap labour under conditions that constitute violations of the right to physical and mental health, physical integrity, freedom of expression and movement of foreign trainees and interns, and that in some cases may well amount to slavery. This program should be discontinued and replaced by an employment programme."

これは日本にとって恥ずべきことだ。外国人研修実習制度は、ときには「奴隷制slavery」となっている、と国連機関により公式に認定され、「廃止せよ」と勧告されているのだ。

ネパール人研修実習生の募集がどうしてもやめられないのなら、少なくとも、仲介業者にはこのような国連見解の説明を義務づけるべきであろう。実態を知らせた上での募集なら、知らせないままの募集より、まだしも「公平」といえるからである。

17:58 | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [人権](#)